
最強の姉妹！ その2

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の姉妹！ その2

【Nコード】

N2248V

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

女性スタントマンの姉妹のもとにやってきた、いとこの後藤五郎。彼は二人にある話を持ちかけ、二人もそれに乗ったのだが…。

人里離れた山奥。そこにその豪邸はたたずんでいた。

とは言っても、ほんの1キロも行けば住宅街はある。油断は禁物だ。

三人は豪邸を見上げ、不安と期待と決意とある種の興奮、いろんな感情を胸に抱いていた。

「あ、マイちゃん、ちよつと…」

「なに？」

「これ」

それは霧吹きだった。

「夜遅くまで仕事頑張ってる感じを出そうと思ってね。そしたら、あのじいさんスケベだからよりいっそうマイちゃんに集中するだろ？」

「五郎さん…いろいろ考えてるのね。ちよつと見直しちゃった」

「へへへ、まあな」

「悪知恵だけは働くのね」

「へへへ…じゃあ、目つぶって」

「分かったわ」

五郎はマイの顔に霧を吹きかけた。

「これでよし」

「頑張つてねマイ。けど、変なことされそうになったら逃げなさいよ」

「うん。分かった」

「じゃあ俺はいつでも出られるようにここにいるから、なんかあったら携帯に電話してくれ」

「分かったわ」

マイが玄関の方へと向かった。

「じゃあ私も行くわ」

その後、レイラも壁を登り、家の裏へと消えていった。

「さすがだな。伊達にスタントマンやってねえや」

五郎は身軽なレイラの動きに驚いていた。

「ごめんくださーい」

マイが営業社員を装って玄関で声を上げた。

「はい？どなたかな？」

竹野内源太と思われる人物の声が中から聞こえてきた。

「夜分、申し訳ありません。わたくしモアライフという健康サプリメント販売会社の白川という者ですが」

当然だが、そんな会社はない。名前も偽名だ。

「健康サプリメント？」

「はい。ぜひ商品だけでも見ていただだけませんか？」

「…」

源太は迷ったが、若い女性の声なので、とりあえず玄関を開けてみることにした。

「夜分にすいません」

「おお。これはこれは…」

源太はさっそく食いついた。まあ確かにマイはかわいいし、スカートは超ミニスカートだ。男ならたいてい食いつくだろう。

「表札を見たのですが、竹野内さんでよろしかったでしょうか？」

「ええ。竹野内です。竹野内源太。まあ、げんちゃんとも呼んでください」

源太はいい歳して、はしゃいでいるようだった。目線はマイのふとももや胸元。

「げんちゃんはちょっと…じゃあ、げんさんでいいですか？」

「もちろん、もちろん。なんでもいいですよ」

源太は嬉しそうだった。五郎の言った通りかなりの女好き。マイは計画通りに事が運んでいるのはいいものの、触られたりしそうで

少しだけ不安だった。

「では、まずこちらのパンフレットから見ていただきたいのですが」
五郎が作った偽物のパンフレットを見せるマイ。

「ふむふむ…」

その頃、レイラは裏から忍び込み、ガラスきりでガラスを切っていた。

「ふう…結構難しいわね」

ガラスきりでガラスを切っているレイラだが、漫画のようにサクッとは切れなかった。

「…よし！」

ようやくガラス窓に丸い穴が空いた。レイラは手を入れ、鍵を開けた。

「急がなきゃ！」

ゆっくりガラス窓を開け、忍び込むレイラ。レイラは小柄なので泥棒には適していた。レイラは金庫のある場所へと早足で向かった。

「なるほどねえ」

「はい。今ならキャンペーン中で、2割引きセールとなっております。ですから大変お買い得となっております」

「うーん…たしかにわしも歳だからなあ。」

「健康なうちから使っていたほうが、より健康でいられるものです」
「よ」

マイは笑顔だった。なかなかの役者だった。

「ところで白川さん、下の名前は何ていうのかな？」

「え？えと…ゆきです」

「そうかそうか、いい名前だね。ゆきちゃん、遅くまで働いてずいぶん汗をかいているようだね。わしがちょっと拭いてあげよう」

源太はハンカチを取り出した。

「え？いえ…お客様にそのようなことをしていただくなんて…」

「いいんだ、いいんだ。気にしないで」

源太はマイの顔にハンカチを近づけた。マイは嫌だったが、ここは我慢だ。

「いやあ、それにしてもゆきちゃんはかわいいね。こんなかわいい子に遅くまで働かせるなんて、君とこの上司はちょっと厳しすぎるね」

「いえ、仕事ですから…」

その頃、レイラは金庫のダイヤルを触っていた。

「マイ…大丈夫かな…？」

マイのことを気にしつつも、レイラは金庫に集中した。果たして金庫は開くのだろうか。暗証番号が変わっていたらどうしよう。しかし…そんな不安は数秒後にすっかり無くなった。

”カチッ”

「！！！」

金庫が開いた。レイラは驚いた。いつきに胸が高鳴った。

「やつ…！」

思わず声が出てしまった。しかし幸いマイに夢中の源太は気づかなかった。マイは少し気づいたようだったがそんなに大きい声でもなかったので動じず、源太との会話に集中した。

（やったわ！開いた！嘘みたい！）

テンシヨン・マックスのレイラ。そしてゆっくり金庫を開けると、そこには現金があつた。そう、札束があつたのだ。一千万ほどだろうか。

（急がなきゃ！）

レイラは持つてきた袋に現金をつめ、逃げる準備をした。

一方、マイである。

「かわいい手だねえ。ところでゆきちゃんはいくつなんだい？」

マイの手をさりげなく握る源太。

「え…あの…に、25です」

「若いなあ。彼氏はいるよねえ」

「い、いえ…それがいないんです」

「ホントかなあ？こんなにかわいいのに」

「仕事が忙しくて…それどころじゃないので…」

「駄目だよ仕事ばかりしちや。もしよかったらわしが美味しい料理を食べれる店につれていってあげようか？」

「そんな…私なんて…」

「なんならこんな仕事やめてわしの秘書になればいい。給料は、はずむよ」

「そ、そんな…もったいないです」

噂通り…いや噂以上のスケベじじいだった。だいたい秘書って何だ？政治家でもないくせに…。

（どうしよう…。姉さん、うまくいったのかな…？）

その時、マイの携帯に電話が掛かってきた。

「あ、あの…すいません。ちょっと会社からみたいです」

「そっか…」

源太はようやく手を離れた。

「もしもし、白川です」

「もしもし、マイ、うまくいったぞ！もういい。引き上げだ」

「…！」

「適当な言い訳して、そこから去るんだ！」

「は、はい。申し訳ありません！ただちに社に戻りますんで！本当に申し訳ありませんでした！」

マイは電話を切った。

「すいません。上司が今すぐ戻って怒ってまして…。これで失礼します。パンフレットだけ置いていきますんで、よろしくお願いいたします」

「ええー？もう帰るのー？残念だなあ。じゃあ、また来てよ」

「はい。げんさんも体にくつ付けてくださいね」

マイは満面の笑みで源太を見た。

「ありがとう。今の笑顔で寿命が10年は伸びたよ」

「ふふふ。じゃあ失礼します」

しかしマイは思った。のちのち金庫を見て寿命が10年縮んでなければいいわねと。意外に冷たいマイ。やらしいことをされてイラついていたというのもあったが…。

マイはレイラと五郎の待つ車へと戻ってきた。

「姉さん、大丈夫？」

「ええ。でも話はあと。五郎さん、早く車出して！」

「分かった！」

車は一目散にその場を去った。金庫のドアは閉めたので源太はその日は泥棒には気づかなかった。翌日にガラス窓に穴が空いていることに気づき、警察に通報することになるのだが。

「マイ！変なことされなかった！？」

「え、ええ…ちょっと手をにぎられたけど…」

「やっぱりか！あのエロジジイめ！」

五郎が言った。

「あんたが言うな。マイ、ごめんね。嫌な思いをさせて」

「大丈夫よ姉さん。姉さんこそ、ケガとかないの？」

「私は大丈夫。かすり傷ひとつないわ」

「いやあ、それにしてもレイラはあざやかだったよなあ」

「そうよ。あんたとは違うの」

「ははは！いやその通り！おみそれしやした！」

五郎は上機嫌だった。それもそうである。作戦は見事、大成功したのだ。傍らには現金がたくさんある。まだ数えてないが、おそらく一千万近くある。

「さあ、とにかく帰ろう」

三人を乗せた車はレイラとマイの住むマンションへと風をきって走り去った。

「ここはレイラとマイの住むマンション。」

「…」

目の前の現金は夢でも幻でもない。しかし三人はしばらく信じられなかった。その額900万円也。

世の中、金じゃない。そんな言葉は嘘だと思った。もちろん金がすべてじゃない。しかし…しかしである。お金が大事であることもまた事実。三人はしばらく無言だった。

「なんか…夢みたいだな」

「ええ…」

「なんだかちよつと恐いわ…」

三人はなぜか正座をしていた。またしばらく沈黙が続いた。

「よし！」

レイラがこの沈黙の口火を切った。

「考えたつてしょうがない。じゃあ分けるわよ」

「そ、そうだな…」

「はい。五郎さんは500万」

「えっ？」

五郎は驚いた。てつきり三等分…つまり300万ずつ分けると思っていたからだ。

「あなたのアイデアだし、借金あるんでしょ？」

「そ、そうだけど…みんなで頑張ったんだし…」

「いいのよ。あとは私とマイが200万ずつ。マイ、いいでしょ？」

「え？ええ、もちろん」

「でもさ…本当にいいのかい？」

「いいの。私たちはお金に困ってないし」

「けど五郎さん、ちゃんと借金返して仕事探してね」

「お、おお、もちろんさ」

「しっかり働きなさいよ」

レイラが釘を刺した。

「ああ、分かつてる。ありがとう二人とも」

五郎は心から感謝しているようだった。

「ほんとに…ほんとにありがとうな！」

五郎は深々と頭を下げた。

「…」

レイラとマイは少し驚いたが、素直な五郎に思わず笑みがこぼれた。

あれから一ヶ月が過ぎた。

五郎はタクシードライバーをしていた。レイラとマイは時々入るスタントマンとしての仕事をこなしていた。

そして今日は真下あらしのライブ当日。マイは友人と映画を観にいていた。レイラはもちろんあらしのライブだ。席は最前列。

「お客さん、着きましたよ」

レイラは五郎の運転するタクシーでライブがあるバーの前に着いた。

「ありがとう。いくら？」

「いいよ、お金は。楽しんで来いよ」

「五郎さん…ありがとう」

二人は笑顔だった。

「じゃあな、レイラ」

「うん」

タクシーは走り去った。レイラはチケットを握り締め、バーへと入っていった。

ライブハウスではないので、そんなに人は入らない。とはいえ30人ほど人がいた。全員女性。レイラは少しだけ不安だった。しかし仕方ない。レイラは最前列で静かに待っていた。

バーなのでカウンターで飲みながら観覧する者もいる。マスターらしき人は、なるほど昔ミュージシャンを目指していただけあってロン毛でイケメンだ。

しかし当然だがレイラの目的はあらしのみ。さあ、まもなくライブは始まる。

「えー、ではお待たせしました」

司会の男性がマイクで喋り出した。

「ただいまより新人バンド”レッドムーン”のライブをお楽しみください」

場内は暗くなり、客たちはまばらに拍手をした。レイラはしっかりと拍手をした。

そこへ登場したあらしたち。レイラはあらしをまっすぐ見つめた。あらしもレイラに気づいて目で合図を送った。笑顔のレイラ。

演奏が始まった。作詞・作曲はあらしだが、あらしのパートはギターである。観客はおおむねボーカルに視線がいていた。レイラとしては、それは良いことだった。

レイラがあらしのライブに来るのは二回目。前回より上手くなっているようだ。曲に聴き入りながら、レイラはあらしとの出会いを思い出していた。

そう。あれは3か月ほど前。

夜、レイラが駅前を歩いていると、ひとりの男がストリートライブをやっていた。真下あらしだ。あらしの歌を立ち止まって聴いているのは、せいぜい4、5人。しかしレイラはあらしの真剣な演奏に聴き入っていた。

演奏が終わったあとレイラはあらしに話しかけた。

「あ、あの…すごく…よかったです」

「…」

「あの…」

「ありがと。俺、真下あらしって言うんだ」

「私は…白鳥レイラ…です」

「俺バンドやってんだけど、普段は歌ってないんだよね。俺のパートはギターだから」

「そうなんですか？」

「作詞・作曲はやってるけどね」

「そうなんですか。けど本当によかったですよ」

「ありがとう。そうだ、今度ライブやるからさ、よかったら来てよ」

「ほんとですか？」

「あ、まあでも、タダつてわけにはいかないんだけど…」

「もちろんです。いかせていただきます」

それが二人の出会いだった。その後ライブを観にいったレイラ。そしてライブが終わったあと、レイラはあらしと食事に行くことになる。

「へえ。女性スタントマン」

「はい」

「すごいね。大変でしょ？」

「そうですね。けど楽しいですよ」

「俺も頑張んなきゃな」

「ふふふ」

「けど偉いね。妹さんの面倒も見てさ」

「いえいえ、お互い助け合って生活してますから。真下さんは実家暮らしですか？」

「俺は一人暮らしなんだ」

「ご両親は？」

「両親は俺が子供の頃、離婚してね。いろいろあって二十歳までは、じいちゃんと暮らしてたんだ」

「そうなんですか」

「まあ、一人暮らしは大変だけど何とか生きてるよ」

「ふふふ」

その帰り際。

「じゃあ、おやすみ」

「わざわざ送っていただいてすみません」

「いやいや。夜道を女性ひとりで帰らせるな俺には出来ないよ」

「ふふふ」

その時、あらしはレイラをまっすぐ見つめていた。

「…」

レイラもあらしをまっすぐ見つめていた。そして

「！」

あらしは無言のままレイラを抱きしめた。

「真下さん…」

レイラは驚いたが冷静だった。レイラも望んでいたことだったからだ。そして、二人はキスを交わし、お互いの気持ちを受け取った。

レイラは、ギターをかきならすあらしを見ながら、そんな過去を思い出していた。

他の観客たちもバンドの演奏に聴き入っていた。あらし自身も言っていたが、確かに作品の出来栄が良かった。バンドの息も合っていた。バーのマスターも仕事を忘れるほど聴き入っていた。

そして全5曲を演奏し終わったあと、場内には盛大な拍手が巻き起こっていた。

あらし自身も満足気だった。もちろん他のメンバーも。

そして次のバンドが自分たちの用意をする中、あらしは外に出て夜風にあたっていた。

「ふっ」

コーラを飲んでいるあらし。そこへレイラがやってきた。

「あらし、お疲れ様」

「おお、レイラ。どうだった？」

「サイコーだったわ、あらし」

「ありがとう。今日はみんなすごく調子良かったよ。勝利の女神様のおかげかな？」

あえてキザなことを言うあらし。

「もう。あらしったら」

しかしレイラは嬉しそうだった。そこへ

「おい、あらし、来週なんだけど…」

バンドでドラムをやっていた男が現れた、が

「っと…わりい、後でいいや」

その男は二人の様子を察し、その場を去ろうとした。

「真也、別にいいよ。来週どうした？」

「いいって、いいって。邪魔しちや悪いしな」

真也は軽く手を振り、去っていった。

「ったく…」

あらしは照れくさそうだった。

その後、20分ほど会話をして、レイラは帰ることにした。あらしはこの後バンドのメンバーと打ち合わせやら、打ち上げやらあるみたいだった。

「じゃあ、気をつけてな」

「うん」

「変な奴に声かけられたりしたら、すぐ電話くれよ」

「大丈夫。私はスタントマンよ。やつつけちゃうから」

「ははは…ちがいない」

「じゃあね、あらし」

「ああ」

レイラは帰っていった。

それから約2時間後。

あらしたちは閉店したバーで軽く飲んでいた。

「いやあ、よかったよ君たち。本当に良かった」

どうやらバーのマスターはあらしたちの音楽が気に入ったようだった。

「ありがとございます」

「俺もあと10歳若かったらなあ」

「ははは」

「で、さっきも言ったけど来週もまた頼むよ」

「はい。ありがとうございます」

真也の話はこのことだった。あらしたちを気に入ったマスターの柴崎は来週もまたぜひうちで演奏してくれということだった。わずかだがギヤラも出すという。

「あらし君の詞のセンスは抜群だと思うよ。もちろんバンドとしてのみんなの技術もすばらしいし」

「ありがとうございます」

「今日のお客さんはきつとまた来るよ」

「ははは、そうなることを祈ってます」

「間違いないって。ささ、飲んで飲んで」

柴崎は楽しそうだった。自分の果たせなかった夢をあらしたちに託しているようにも思えた。あらしたちも嬉しそうだった。今までやってきた努力が実りかけている。そんな気がしていた。

時は流れていった。

レイラとマイは女性スタントマン、五郎はタクシードライバー、あらしはミュージシャン、それぞれの道を懸命に歩いていた。

レイラは資金面であらしに手を貸したりしていた。新しいギターを買ってあげたり、時には生活費を出してあげたり、しかしあらしもなるべく頼らないようにしていた。男としてもプライドもあるが、やはり自分の力で生きるべきという人としてのプライドがあるのだらう。

マイはパン作りが趣味らしく、将来はパン屋を営みたいと密かに思っていたが、そのことは姉には言っていなかった。本当に本気でパン屋を開業するつもりになったら言おうと思っていた。

五郎は真面目に働いていた。柄にもなく毎月定期的に貯金もしていた。パチンコにも一切行かなくなり、休みの日はジョギングしたりもしている。何が彼をここまで真面目にしたのかよく分からなかったが、とにかくレイラとマイは感心していた。

あらしはと言うと、あのライブ以降、ファンが少しずつではある

が確実に増えていった。あらしの言ったとおりレイラが勝利の女神かどうかは分からないが、ライブを重ねるたび、観客は確実に増えていった。ライブハウスの経営者側から声がかかるくらいにまでなっていた。その場合、当然ライブハウスの使用料は必要なく、ギャラも貰える。そうならレイラにお金の援助もしてもらわなければならないし、まさに一石二鳥だ。

そして半年の月日が流れた。

「きゃー！」

「かつこいいー！」

「あらしー！」

「いつきー！」

いつきとは、あらし達のバンド”レッドムーン”のボーカルのこと。本名はかずき（一輝）だが、ボーカリストとしてはいつきという読み方で活動している。

ライブでの最後の演奏が終わったあと、たくさんの黄色い声がかたました。

レイラも来ていた。が、席は最前列ではなかった。最近は人気があり、なかなか最前列に座れないのだ。嬉しい反面、少し寂しくもあった。

そのライブの終了後。

「あらし、お疲れ。今日も素敵だったよ」

「ありがとう」

「ねえ、今日…一緒に帰れないかな？」

「わりい、ちょっとメンバーと打ち合わせがあるんだ」

「そう…」

「今月はちよっとスケジュールが詰まってね」

「そう…」

心無しか、あらしはそっけない感じがしていた。

「なんか…もうプロみたいね…」

「そうだな…でもまだまだだよ。もつと売れなきゃ」

「…」

レイラは不安げだった。もつと売れなきゃ…。昔なら、もつと頑張らなきゃ…だったのに。

「それじゃあレイラ、気をつけてな」

「うん…」

あらしは去っていった。

「…」

レイラはあらしの後ろ姿をずっと見ていた。そして泣きそうになった。あらしは…変わってしまったのではないか？そんな不安でいっぱいだった。

ここは例のバー。レイラは誰かと話がしたくてここへやって来た。
「いらつしやい」

「こんばんは、マスター」

「おお！確か…レイラちゃん。あらし君の彼女の」

「嬉しい。覚えていてくれたんだ」

「もちろんさ」

「ビールもらえる？」

「はいよ！今日はあらし君ライブだったんだろ？どうだった？」

「うん。よかったよ…」

レイラが元気がないのは、誰の目から見ても明らかだった。

「なんか…あつたの？」

「え？ええ…ちよつとね…」

「…」

マスターにも思うことはあつた。そしてある秘密も持っていた。迷ったが、話すことにした。

「なあレイラちゃん」

「ん？」

「実はね…あらし君のことなんだけど…」

「!？」

「前にね……ここへ……女と来たことがあるんだ……」

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2248v/>

最強の姉妹！ その2

2011年7月27日03時27分発行